貴方の青春を教えて下さい～White　Memorial　Song～

神楯零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
貴方の青春を教えて下さい～Ｗｈｉｔｅ　Ｍｅｍｏｒｉａｌ　Ｓｏｎｇ～

【Ｎコード】
Ｎ２７５１Ｔ

【作者名】
神楯零

【あらすじ】
仕事の失敗で全てを失った『わたし』は、失意の中さ迷う内にとある旅館にたどり着く。
『白雲旅館』そこで出会う女将『しぐれ』を始めとした不思議な少女達。彼女達は自分達を『終わった者』達と呼び――
純粋無垢な彼女達との出会いは『わたし』に何をもたらすのか……
『貴方の青春を教えて下さい』の改訂版です。

「貴方の青春を教えて下さい～Ｗｈｉｔｅ　Ｍｅｍｏｒｉａｌ　Ｓｏｎｇ～」

もし、人生のどん底があるとすれば、まさしく今であろう。
何処と知らぬ場所でわたしは立ち尽くしていた。
絶望に、失意に、この世の悪意に包まれながら。
わたしの転落は有りがちなものだ。会社でそこそこの立場で、大切な仕事で大ポカをやらかしてしまった。
それでもわたしは金を何とか工面しようとしたが、結局それは借金を増やす事となった。
結果としてわたしは、会社には居られず退社した。
家も失い、残ったのは借金だけ……いや絶望も残ったか。
だからと言って自殺する勇気はなく、少ない路銀で場所を転々としていた。
するといつの間にか、田舎に着いていた。
名前も聞いた事も無い地名だ。
一体何処まで来てしまったのだろうか……？
駅を降りると、田んぼが広々と続き、緑が美しい山も見えた。
のんびりとした雰囲気はわたしの心を一瞬癒すが、それは本当に一瞬。再び、自己嫌悪に囚われる。
同僚や上司の顔が思い浮かぶ
。
オマエナンテイナケレバ。

わたしは一体何の為に生きて来たんだろう？
わたしに生きている価値はあるんだろうか？

……死のう。

わたしはこの時、確かに決断した。死んでしまえば今より遥かにマシな筈だ。山には崖ぐらいあるだろう。そこから落ちて死のう。

死ぬならこう言う場所が良い。山を目指し、長閑な田舎道を歩きながらそんな物騒な事を考えていた。わたしは山登りをし始めた。スーツ姿で山登りをする姿は他人から見れば、滑稽だろう。

暫く歩く、道無き獣道。落ち葉を踏み締め、かしゃかしゃと音が鳴る。

泥や土でスーツが汚れるが気にしない。

それなりに年季の入ったスーツだ。

第一、どうせ死ぬなら関係無い。

歩く。ただひたすら。適当に歩き続ければ、いずれ崖に着くかと思っていたが……そんな都合の良い場所はない。

すると奇妙な建物が見えてきた。こんな山奥に何が、と思い近付くと、

『ようこそ！　白雲旅館へ』

と恐らく手書きで書かれたと思われる看板の文字が見えた。どうしてこんな山奥に旅館が？

疑問に思いながら、眺めていると、

「いらっしゃいませ！　ようこそ白雲旅館へ！」

唐突に響いた若い女の声にわたしは驚く。

正面に視界を移すと、女の子が立っていた。

純粋無垢そうな大きな瞳に、長い美しい髪。柔らかい優しげな印象を受ける女の子だった。　まだ、１６歳くらいの女の子が和服、つまり仲居の格好をして立っていた。

思わずわたしは見惚れていた。

「お客さま……ですよね？」

少女の問い掛けでわたしは正気に戻る。

違うと否定する前に、
「ささっ。こちらにどうぞ！」
腕を引かれ旅館に入る。和風なエントランスは予想外に広く、清潔だった。
「一泊で宜しいですよねっ？」
いや……わたしは今文無しなのだ。とてもでは無いが、宿泊代など払える筈が無い。
わたしはそう言ったが、
「それなら、お代は結構ですよ！　ごゆっくりしていって下さいね？」
一体……どう言う旅館なのだろうか？わたしが驚いていると……
「もしかして、泊まるの嫌ですか？」
泣きそうになった少女の顔を見ると、断る事なんて出来なかった。そもそも断る理由も見つからないし……
「はいっ！　私は『しぐれ』っていいます。お客さまのお世話をさせていただく、女将です」
再び、驚く。こんな少女に女将を任せているとは……
ここの経営者は一体何を考えているのだろう？
金持ちの道楽なのかも知れない。まったく。良い身分だ。
「では、お部屋にご案内させていただきます」
泣き顔から一転して満面の笑顔。部屋に案内と言う事で、彼女の後を着いていく。
途中、
「いらっしゃいませ！」
「……ませ」
「……若いな」
様々な仲居さんに声をかけられた。仲居さんに共通するのは皆少女だった。
見かけで言えば女将のしぐれが1番年上に見える。
皆若いと言うのに何故こんな山奥の旅館で働いているのだろうか？

するとしぐれは、少し複雑そうな表情をして、
「……私達は『終わった者』達ですから。他に行く当てが無いんです」
そんな回答。わたしには意味が分からず、首を傾げているしかなかった。
「あっ。ごめんなさい。気にしないで下さい。ささっ着きましたよ」
疑問に思いつつも案内された部屋に入る。畳の敷かれた綺麗な和風の部屋だ。テレビなどは無いがクローゼットなど家具も置いてありちゃんとした旅館の客室だった。
カーテンは閉められていて、景色は見れない。
「今、開けますね」
しぐれがカーテンを開けた。
光りが部屋に降り注ぐ。景色が視界に入り――

呼吸が止まった。

とても美しい。
言葉には表せない、それは美しい景色が広がっていた。
見渡す限りの木々が織り成す緑、鳥達が飛び交いそれを強調させている。
わたしにも純粋に自然を美しいと思える感情が残っていたのか。
「綺麗ですか？」
綺麗だ。わたしは正直にそう答えた。
「夏は緑がとっても綺麗なんです。秋は紅葉が凄く綺麗なんですよ」
しぐれの説明を聞きながら、わたしは目の前の景色に魅入っていた。
なんて壮大さだ……わたしの悩みなんてくだらなく感じてしまう。
「綺麗な景色を見て、美味しい物を食べるのが一番疲れを癒やせるんですよ。簡単な事なんですけど……忘れがちなんです」
会社の窓から見る景色はただビルがそびえ立つだけだ。家から見

る景色も酷いものだ。
「……お客さま。もし、よかったら……よかったらでいいです」
……
「とっても疲れた顔してます……何かあったのか話をして下さい。それで少しでも楽になれるなら……」
……ああ……わ、たしは……
口は走り出すと止まらなかった。会社で失敗した事……辞めた事……そして……

わたしなんか……死んだ方が良いんだ……

ぱちん。
甲高い音が響いた。
頬が熱い。
驚いて正面を向くと涙を浮かべ、怒った表情をしたしぐれ。
「なんて事言うんですかぁー！！」
そこでやっと……叩かれのだと気付く。
「どうしてそんな簡単に死ぬだなんて言うんですか！？」
しぐれは猛烈に怒っているようだ。
彼女がどうしてそこまで、怒るのか分からないけど……
「駄目ですよ！　口にしても思っても！」

でもこれだけは、はっきり解る。

しぐれはわたしの為に怒っているのだと。

「いいですか！　お客さま……ってあれ？」
知らずわたしは涙を流していた。
こんな……どうしようもないわたしに本気で怒って、そして思ってくれる人が居る……そう思うと……熱い気持ちが溢れてくる。長

らく忘れていた想いが……
「は、はわわ…！　ご、ごめんなさい！　泣く程痛かったですか！？」
慌てふためくしぐれ。その様子を見ていると自然と笑みが浮かんでいた。
わたしは、そんな事はないと言った。
「……本当にごめんなさい……お客さまを叩いちゃうなんて……」
いや……よく効いたよ。ありがとう。
そう言ってわたしはしぐれの頭を撫でる。
「……ふぇ？」
怒鳴られとでも思っていたのか、頭に手を当てた時はびくっとしたが、素直に受け入れてくれた。
「……えへへ」
屈託無く、笑うしぐれ。
娘が居たら……こんな感じなんだろうか？
「……駄目ですよ」
わたしに頭を撫でられながら、悲しそうな、本当に悲しそうにまるで自分の事のように、そう……しぐれは呟いた。
「死んじゃ……」
分かってる……分かってるよ。
わたしなんかが死んでも悲しむ人が目の前に居るんだ。
死ねる……もんか。

「……そろそろ。飯なんだけど？」
少年のような声が部屋に響いた。驚いて、入口を見ると白い髪の男の子が立っていた。
目つきは鋭いが、顔立ちは幼い。
「……はぅ！　しろ君いつの間に！」
慌ててわたしから離れ、大仰に驚くしぐれ。
「ちょっと前だけど……邪魔だったか？」

「ち、違います！　そんなんじゃないです～」
「冗談だって。どうせ、また人生相談でもしてたんだろ」
しろ君と呼ばれた少年は溜め息を吐く。
彼は一体誰かとわたしはしぐれに聞く。
「この旅館の料理長さんです」
再びわたしは驚く。その若い歳で料理長とは……
「そんな立派なモンじゃないさ。ほら、そこの奴も飯だぞ」
無礼極まり無い態度だったけど、不思議と腹は立たなかった。
「失礼ですよ！　しろ君！　お客さまなんですよ！」
「知るかよ。オレは飯作るだけだ。接客はアンタの仕事だろ？」
「しろくん！！」
何やら口喧嘩を始める二人。何やらとても微笑ましい光景だ。
「上司の言う事は絶対なんです！」
「いつからアンタが上司になったんだよ……」
「じ、じゃあ私の方が歳も上です。お姉ちゃんの言うことは絶対なのです」
無茶苦茶な理論だ。それで通ったら世界の弟さんが大変な事になる。
あれ？　というかしぐれはしろ君より年上なのだろうか？
「あれ？　アンタ何歳だっけ？」
同じ疑問を思ったのかしろ君がそんな事を聞いた。
「23歳ですよ？」
……え？
「……マジ？」
……わたしも彼に同意だ。
「え？　え、ええ！？　何でそんなに驚くんですかぁ？　ああ！、お客さまままでぇ！！」
「……俺より5つよりも年上……」
ショックを受けるしろ君。……駄目だ。信じられない。誰がどうみても高校1年くらいにしか見えない。

「……な、何か釈然としませんが……とにかく、しろ君解りましたか！」
「……はいはい。とにかく飯が冷める。もう『李の間』に料理並べてあるんだからな」
「確かにそれは大変です。行きましょうお客さま」
……世の中とは不思議なものだ。

『李の間』と言う広間に案内された。畳み造りの広い部屋で窓からは中庭が見える。
その部屋のテーブルに並べられている料理は和風……つみれ汁や鯵の開き、鯛の尾頭付きの刺身に山菜のご飯。どちらかと言うと素朴な感じだ。
「アンタ見た感じこーゆうのが好きそうだったからな」
わたしは確かに豪華なモノよりこの方が落ち着く。
早速一口頂く。
「……」
おいしい。田舎を思い出す優しい味だ。
「……」
じっとこちらを見ているしろ君。
おいしいと彼に伝えると。
「……！　当たり前だろ。俺が作ったんだからな」
そっぽを向くしろ君。顔を赤くしているが少しだけ嬉しそうな顔だった。

食事が終わると温泉に案内された。
脱衣所も清潔な木造りだ。服を脱いで浴室に入る。
……わたしは再び驚く。木造りの広い浴槽。恐らく檜造りだろう。ゆっくりと湯舟に浸かる。

湯加減も最高でこの世の天国なのかもしれない。
窓から覗く景色もまた、綺麗だった。
「おや。客が来てたのかい」
そう言いつつ入ってきたのは背の高いスラリとした美人の女性。
しぐれと同じく中居の格好をしていた。
「邪魔しちゃ悪いね」
いや。掃除とかならお気遣い無く。
わたしがそう言うと、
「そうかい。じゃアタシも気にしない」
サバサバとした男子のような口調で話す女性だが、不快ではない。
「アタシは『あずさ』だ。あんたは？」
わたしは名乗る。
「へぇ！　いい名前じゃないか。大切にしなよ」
わたしはありがとうと言い、再びのんびり浸かる。
「しぐれはいい子だったろ？」
わたしは肯定する。
「押し付けがましいかも知れないけどな。アタシもここに居るのは長いんだ。もう何年経ったか分からない。ここは楽しいからな。でもな」
少し、淋しそうに。あずささんは、
「いずれは……ここを去らないといけない。あんたもここを去る時は……」
「心の底から笑えるようになりな」
わたしは……もう一度笑えるのだろうか？
浴衣に着替えわたしは客室を目指していた時、
「ちょっと！　どうしてくれんのよ！」

「落ち着きたまえよ。騒いでもいいことはないぞ」
何やら騒がしい言い争いが前方から聞こえてきた。
「楽しみにしてたのよ！？　最後に取っておいたのに！！」
一人は見かけは１８歳くらいの女の子。気の強そうな吊り目が特徴的だ。
凄い剣幕で怒っていた。
「と言ってもなぁ……もはや戻らぬし」
もう一人は可愛いらしい人形のような見かけを持つ、小学生低学年くらいの女の子だった。
古めかしい言葉と落ち着き払っていた。
「ほら……後ろにお客が来ているぞ？　迷惑だろう」
「あぁ！！？」
凄い顔で振り向いた。凄く恐い……
「そんなの知ったこっちゃないわよ！」
「仲居としてそれはまずかろう」
埒があきそうに無いのでわたしは何があったか聞いてみた。
「コイツがあたしのプリンを食べやがったの！？　楽しみに取ってたのに！」
と小さい女の子を指差しながらそう言った。
理由は実にくだらなかった。
「くだらくなんかない！」
いや……口に出してはいないのだけど……
「仕方あるまい。余りにも美味い、しろ君のプリンが悪い」
「開き直ってんじゃないわよ！」
再び、口喧嘩を始める二人。原因はしろ君の作ったプリンにあるようだ。
……仕方ない。厨房の方に行ってみよう。
「なんだよ。厨房は立入禁止だぞ」
皿を洗いながらぶっきらぼうに言うしろ君にわたしは事情を説明

する。
「……またか」
苦々しそうに悪態を吐き出すしろ君。
「美味いと言って食ってくれるのはいいんだけどな。それで喧嘩されちゃ堪らないぞ」
でもそれほど、しろ君の料理が凄いって事だ。
「……褒めても何もでねーぞ」
顔を赤くして照れるしろ君。彼は彼で１８には見えない。
「……冷蔵庫に三つ冷やして固めてあるから持っていけ」
ありがとうと返事をして、三つ？　と気付く。
「アンタのだよ。そういやデザート付けて無かった」
……ありがとう。
わたしはもう一度お礼を言って厨房から出ていった。
「ふん」
そう小さく悪態吐くしろ君を背中に。

「ほぉ……気がきくな」
「……ふん。当たり前じゃない」
……二人共感謝されている気がしない。
「いやいやちゃんと礼は言うよ」
また心を読まれてしまった。
「ありがとう。しろ君のプリンは絶品だぞ？　ほら『ひめの』も礼を言いたまえ」
「元はと言えば『すずね』！　アンタが！」
「私が悪かったのは認めるよ。だがお客は別だろう。世話になったのなら礼を言うべきだ」
「む……それは……そうだけど……」
「それ以上駄々をごねるならしぐれにお客に無礼を働いたと報告させていただくが？」
「……う。大泣きされるのは嫌ね」

成る程……しぐれは怒るんじゃなくて泣くのか。しぐれらしい。
「……ありがと」
どういたしまして。ようやくわたしもそう言えた。
長かった……
「うむ。よく出来ました」
満足そうに笑うすずねちゃんに、顔を赤くしてそっぽを向くひめのちゃん。
……どっちが年上か分からないな。
「すまないな。騒がせてしまって」
いや。何だかだと言ってわたしも見ていて楽しかった。
「……悪かったわ。プリンは本当に美味しいわよ。ましろの馬鹿の唯一の特技だしね」
二人はそう言って並んで去って行った。
……喧嘩をする程……と言う奴なのだろう。

部屋に帰って、早速一口頂く。
……これは、喧嘩が起きる訳だ。
ほっぺが落ちるかと思ったぐらいだ。
プリンを食べ終えるとわたしは、布団の上に寝転び四肢を伸ばす。
そうしてぼぅとしてみる。
こうしてこんな風にのんびり出来たのは何年ぶりだろうか……
「失礼します」
そう言いながら部屋にしぐれが入ってきた。
いやしぐれだけではなく他の仲居さんも入ってくる。
あずささんに、すずねちゃん、ひめのちゃんに、しろ君まで居た。
一体なんだろう？
「あの……お願いがあるんです」
お願い？　何だろうか……無理な事以外なら何でも聞いてあげたいけど……
「はい……」

少し溜めて、
「貴方の青春を教えて下さい」
そうしぐれ言った。
わたしの、青春……？
「はい。貴方の過ごしてきた時を……青春を教えて欲しいんです」
わたしの青春……そんな特別な事していない。ありふれた事だと思う。それでも良いのだろうか？
「……はい。それでもいいですよ」
わたしは……

高校時代わたしは文化系の部活しかやっていなかった。ほとばしる汗だとか……熱い友情とか……そういった事は無かった。勉強して、友達とか話して……それだけだった。
「でも……楽しかったんですよね？」
……そうか。
ありふれて、退屈で、輝いてる訳じゃないけど……楽しかった。何気ないドラマの話しや恋愛の話しで友達と話して……楽しかったな……それだけは事実だ。
それがあってわたしは今ここに居る。どうして忘れていたのだろう……
そんなわたしはやり直せるのだろうか？
「いえ……やり直すコトはできません。人生は一回だけです。だから……これからを生きて下さい。変われないかも知れません。変わらかも知れません。でも変わろうと生きて下さい。貴方には素敵な青春があったんですから」
しぐれの言葉に記憶がフラッシュバックしていく。浮かんでは消えていく。
例えば、辛い時があっても友達がいる。
例えば悲しい事があっても明日良い事がある。
そうしてきた高校生活……今だってそれは変わらない筈だったの

だ。わたしがただ……忘れていただけだったんだ。
そうか……それでいいんだ。わたしには青春があった……
それなら、わたしは生きていける。
簡単な……事だったんだ……
「はい。だからお客さまは笑ってもいいんです」
そう言ってしぐれは微笑んだ。優しく、儚い雪のように。
「お話……ありがとうございました。お客さま」
礼を言うのはこっちだ。
ありがとう。
「……！」
何故かしぐれは驚いた表情をし、それから満面の微笑みを浮かべて、
「はいっ。それではおやすみなさい」

そう言って部屋から出ていった。
一体……？
しぐれに次いで他の仲居さんも出ていく。最後はしろ君。
「何だ。アンタ……」
ふっと……笑い、
「笑えるじゃん」
しろ君はそう言い出ていった。自分では分からない程自然にわたしは笑っていたのだろう。

布団に潜ってすぐわたしは寝てしまった
信じられない程よく寝た後、とうとうチェックアウトの時が来た。
もう一泊出来ないかとしぐれに聞いてみる。
「……規則で一泊しか出来ないんです。ごめんなさい」
しぐれは複雑そうな顔をしてそう答た。少し残念だった。しぐれがそんな顔をすると言う事は本当に無理なのだろう。

見送りは全員居た。あずささんにすずねちゃん、奥の方にはひめのちゃんとしろ君も居た。
「……お客さん……三つ約束して下さい」
何だろう？　全て守りたいけど……
「一つはここの旅館は誰にも話さないで下さい」
……分かった。約束一つ。
「二つ目は帰る時は絶対に振り向かないで下さい」
……分かった。約束二つ。
「最後に……時々でいいです。私達の事、思い出して下さい。それだけで……私達は満足ですから」
最後の約束。分かった。絶対に忘れない。きっと一生覚えてる。
「はい！　それではお帰りにお気をつけて。白雲旅館にお越しくださいまし、ありがとうございました」
『ありがとうございました』
わたしは手を振り、背をむけた。
温かい場所だった。こんな場所があるなら世の中捨てたモノじゃない。いや……わたしが捨てただけで、実はありふれたモノなのかも知れない。

ねぇ……君達は一体？
最後に、わたしは振り返らずにそう聞いた。
「私達は『終わった者』です。私達は青春を知りません。知ることができませんでした。だから私達はお客さまから青春が聞きたいんです。それだけで私達は十分なんです……消えかけた貴方の青春（おもいで）が、もう一度輝きますように」
彼女達はきっとそのありふれた事さえ出来なかったのかもしれない。
だからあんなにも怒ったのだろう。
だからわたしに青春の事を聞いたのだろう。

だから優しかったのだろう。
その痛みを知っているから。
わたしは振り向かなかった。　振り返ればきっと、帰りたくなくなるから。それは……駄目なんだと想う。
わたし振り向かない。約束したから。
きっと二度と逢えないと知っていても。
約束だから。

気がつくとわたしは電車に乗っていた。
目的地はわたしの地元だ。一度里帰りを決めたのだ。
ここからきっと始められる。生まれ変わるように。
「ありがとう。しぐれ。わたしは大切な事……思いだせたよ」

どう致しまして。

しぐれのそんな声が聞こえてきそうだった。

（後書き）

感想お待ちしています。
青春は大事にしましょう。
輝けるモノでありますように。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2751t/

貴方の青春を教えて下さい〜White　Memorial　Song〜

2011年5月15日12時10分発行